

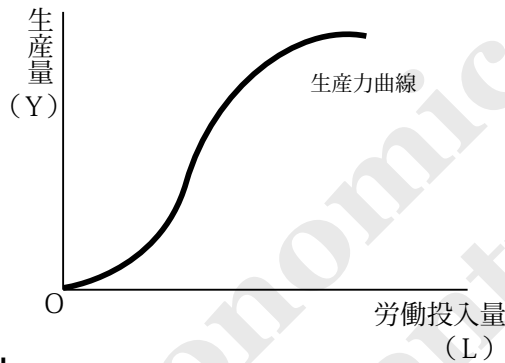
# 特 利潤最大の生産要素投入量の決定

Key Point  $\frac{w}{P} = MP$  (実質賃金 = 限界生産力) が利潤最大の生産要素投入量の均衡条件になります。

生産者は労働を投入して、生産を行い、その生産物を販売して収入を得ることになります。したがって、これまでのように生産量で収入の大きさをに見るのではなく、労働の投入量で収入の大きさを見ることも可能になるはずです。

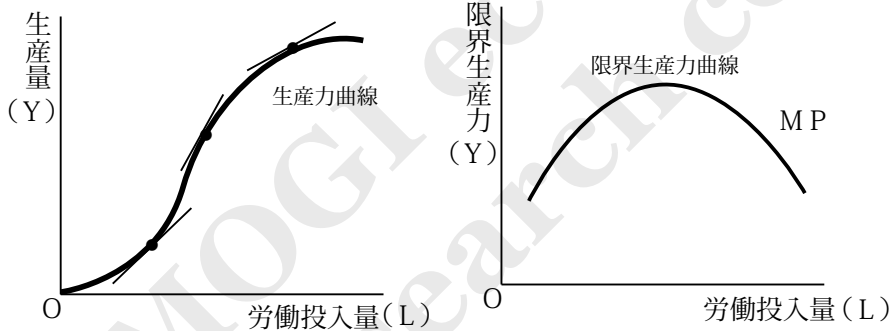
## プロセス-1 生産力曲線の導出

労働の投入量を増加させていくと、当初は生産量は逓増しますが、やがて逓減していきます。(縦軸が生産量なので、横にした総費用曲線をイメージしましょう。) この生産量 (Y) と労働投入量 (L) の関係を表したものが生産力曲線です。



※ここでは、生産要素を労働のみとして単純化させています。

## プロセス-2 限界生産力曲線の導出



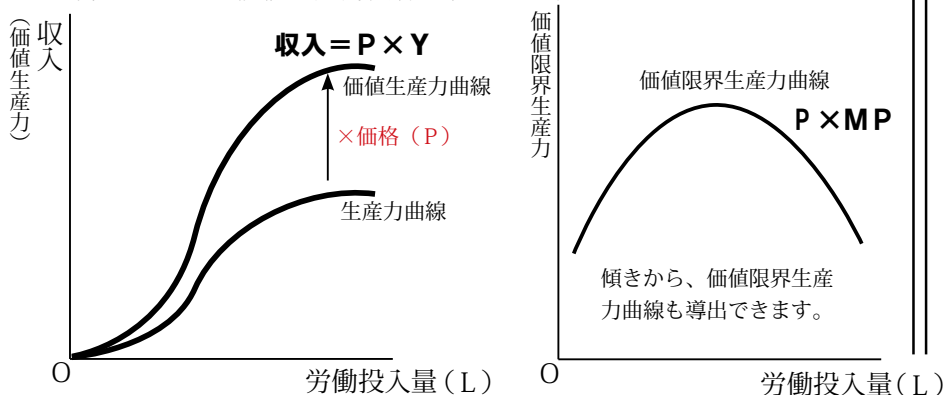
次に、生産力曲線の傾きから、限界生産力曲線を導出します。

補足

限界生産力：MP (marginal productivity)

## プロセス-3 価値生産力曲線の導出

次に、縦軸の生産量 (Y) を収入に換える作業を行います。収入は生産量に価格をかけ算する (収入 =  $P \times Y$ ) ことによって求められます。この生産力曲線に価格をかけ算したものを価値生産力曲線と言います。

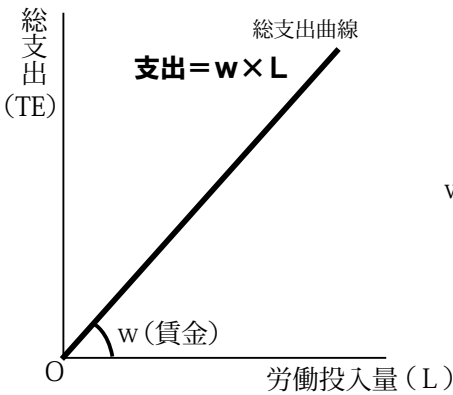


補足

価値生産力は価格をかけ算するので、生産力曲線はその分だけ上方へシフトします。

**プロセス-4 総支出曲線と限界支出曲線**

労働を投入すると、収入が得られると同時に費用もかかります。この労働者への支出（賃金 × 労働投入量）は総支出曲線として表されます。



傾き × 長さ = 高さ  
**賃金 × 労働投入量 = 総支出**  
 $wL = TE$



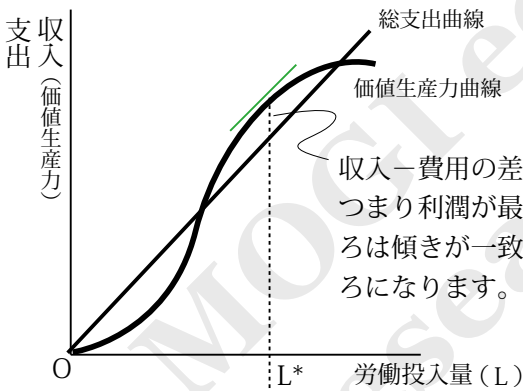
傾きから、限界支出曲線も導出できます。  
 限界支出曲線は、総支出曲線の傾き、つまり賃金 (w) で一定となります。

**補足**

総支出 : TE (total expenditure)

**プロセス-5 利潤最大の労働投入量の決定**

最後に、総支出曲線と価値生産力曲線の2グラフを1つの図に描きます。



この傾きの一致は、限界支出曲線と価値限界生産力曲線の均等として表すことも可能になります。

**利潤最大時の状況**

限界支出 (ME) = 価値生産力 (P × MP)  
 また、限界支出 (ME) は w (賃金) に一致するので、 $w = P \times MP$  と書き換えることができます。

$w = P \times MP$  の両辺を P で割り算します。

$$\frac{w}{P} = MP$$

**実質賃金 = 限界生産力**

が利潤最大の均衡条件になります。

